

# 明代・清代中国の日本・琉球語資料における日数表現とその周辺

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/17107">http://hdl.handle.net/2297/17107</a>

# 明代・清代中国の日本・琉球語資料に おける日数表現とその周辺

## 室井 努

キーワード：数詞、暦日、琉球方言、日数、中山伝信録

要旨：本稿では、『中山伝信録』にある暦日2～10日の表現のチタチ〇カは、日本語の暦日数詞体系がくつたち〇日——とうか〇日——はつか〇日>というものであったことを保障するものではないという立場から、広くその他の資料との比較を行った。『中山伝信録』の暦日は本土方言の『日本風土記』のそれと、チタチがないことを除き、二十四日などの一位の4日がヨッカになるなどその体系が酷似していた、また、暦日と算日とを音訓で分ける方法もあった等と考えると、古い表現が残ったと考えるより、何かの要因で有標形として必要になったのがチタチ〇カではないかと推測した。

### 0 はじめに

拙稿（1993）等において簡単に指摘してあったが、稿を改めて論じ直すべきであると認識しつつ、そのままになってしまったものに、中古における「つたち〇日」の表現形と琉球方言資料にあるとされるチタチ〇カとの関係性の問題がある。

この両者の関係について最初に指摘したのは安田（1974・1975）であり、そこにおいては中古にくつたち〇日——とうか〇日——はつか〇日>という暦日の数え方であったものとし、その傍証として、清の冊封使・徐葆光の著書『中山伝信録』（1721年）の「時令」に記録された当時の琉球首里方言での暦日の記述や、現在の八重山方言における暦日と算日との日付の数え方の区別を挙げている。しかしこれらは過去に暦日の一桁の日数を「つたち〇日」と表現することもあった、ということ証拠づけることにはなっても、中古にくつたち〇日——とうか〇日——はつか〇日>という体系的な暦日表現があったという議論に結びつけることについては飛躍があるものと考えられるし、また、現代八重山方言での暦日表現の扱い方についても疑問を感じるものである。

『中山伝信録』については、豊見山（2006）などが公にされるなど、今後文学・語学・歴史学をはじめとした、東アジア全体での資料性が期待される段階に来ている。本稿では、こうした背景を踏まえ、『中山伝信録』を中心とした明代・清代の日本語および琉球方言資料について、暦日とその周辺、具体的にはその他の数を数える表現

や暦月、時間の表現を体系的に見ていこうと考える。

なお、琉球語の漢字資料の音価推定については多和田（2004）があり、また、『中山伝信録』についてはそれに先立ち多和田（1998）において精密な推定がなされているが、本稿においては先行研究や明代日本語資料との対比を考え、近似のカタカナにて語形を示すことにする。

## 1 本稿の目的

前節において、安田（1974・1975）の論述に「飛躍があるものと考えられる」「疑問を感じるものである」とあえて否定的な表現を用いた理由について説明するところから始める。

日数表現を算日と暦日の二つに分けて考察した嚆矢は安田（1972）であるが、この二つを分ける理由付けとして挙げられているものを要約すると、用法が違う、（日本語ではおおむね語形が同じでも、英語等では異なった表現になる）、ということに尽きる。しかしながら、例えば現代日本語における算日表現のフツカとニジュウクニチとでは、前者については使用頻度も高ければ、2日間という時間に対してその文脈に即した特有な意味が帯びる（例として「一両日」などというようにイチニチという基本単位の日数の倍数として語形まで変化をさせることがある）のに対し、後者については使用頻度も少なく、また付帯する意味合いも極めて事務的なものに限られる。しかし、暦日表現のフツカとニジュウクニチとは、それが月初か月末かとか時間的にはどちらが早いかといったニュアンスはともかくとして、基本的に月の中のある特定の日を示すという意味では等価なものである。よって、算日表現はその数が大きくなるに従い、使用頻度や必要性が低くなるわけであるから、区切りのよさなどや便宜的な使用が容認され（、また必要に応じて表現形式（語形）を作る可能性があ）るといったことが考えられるその一方で、暦日表現は1日から30日まで（現行暦では31日まで）の等価な日々閉じた集合体としてその表現系を考えなければならない。そもそも暦日というものが、中国の暦法の導入に際して必要となったものである以上、順序数詞か基数詞かといった違いは性格の違いのひとつに過ぎず（算日数詞にも順序数詞的表現のあることはいうまでもない）、根本的なものではないであろう。

以上を踏まえ、再度外国資料である明代・清代日本語・琉球語資料の暦日を、その周辺の表現との関係を見ることによって、どのような価値を持つものであるかを明らかにしたい。

## 2 『中山伝信録』の暦日表現の検証

安田（1974・1975）において既出であるが、論の出発点になるので、『中山伝信録』の暦日を再掲し、その上で、暦月やその他の数詞表現を確認していく。

テキストはこれもいろいろと公にされているが（注1）、本稿の後半で他の資料との対比をしていくことになるから、既に各語彙項目を対比し図表化している坂井健一

編『「琉球館譯語」・「使琉球録」・「音韻字海」・「琉球入學見聞録」・「中山傳信録」寄語對照手冊』1975年を使用し、所在の表示もこの語彙番号によって行う。また、限られた本稿枚数を有効に利用するため、改行等はなるべく行わず、割注・小字の類は括弧内に入れて割注等であることを示す。

①初一（之搭之）初二（福子介）初三（之搭之密介）初四（之搭之哨介）初五（之搭之一子介）初六（之搭之美介）初七（之搭之椰介）初八（之搭之鴉介）初九（之搭之古魯）初十（之搭之土介）十一（之一子泥子）十二（之泥泥子）十三（之三泥子）十四（之哨泥子）十五（坐古泥子）十六（坐六古泥子）十七（坐十七泥子）十八（坐瞎之泥子）十九（坐苦苦泥子）二十（瞎子介）二十一（瞎子介痘）二十二（瞎子介泥泥子）二十三（臑祖三泥子）二十四（臑祖哨介）二十五（臑祖姑泥子）二十六（臑祖六泥子）二十七（臑祖失之泥子）二十八（臑祖瞎之泥子）二十九（臑祖苦泥子）三十（三祖泥子）（87～116）

安田（1974）は①の初三から初十までチタチ○カの表現形を採っていること、また、宮古・八重山方言について記した著作にトオカ○カ・ハツカ○カという語形があったらしいこと（注2）をもって、中古のくつたち○日——とうか○日——はつか○日>という暦日の数え方があったことの傍証とする。その一方で、原田（1999）は①のこの表現形について、「十日までの之搭之は、初一の之搭之を加えている。（稿者中略）。之搭之が、初に相当すると誤解したのであろう」（552頁の注4）と推測している。

このような大雑把な把握では、他の資料との対比ができないから、もう少し細かく①の特徴を見てみよう。

まず、上旬においてはa：1日はチタチ、b：2日はフツカ、c：3日以降10日まで○カの和語系表現でありチタチを頭につける。d：現代日本語では漢語表現を用いる11日から19日・21日から29日はおしなべて漢語系であるが、21日は解釈の困難な語形・22日は十位が和語で一位が漢語というかなり変わった表現である。e：10日・20日・30日の切りのいい暦日のうち、30日のみが漢語数詞であり現代日本語と同じである。f：現代日本語では和語と漢語の混種語表現である14日と24日について、14日は漢語のみの表現形であるのに対し、24日は現代日本語と同様の表現形である。

明代・清代中国資料は資料ごとに日本語・琉球語に当てられる読み方の漢字表記が異なるので、そちらの音価推定の問題などに巻き込まれぬよう、以降本稿では以上のa：からf：の6点に焦点を絞って、他との比較を行っていこう。

### 3 暦日以外の、暦月およびその他の数詞表現と『琉球入學見聞録』の表現

前節の暦日表現の性格を知るには、同一資料内での他の数詞表現との比較を行うことと、類似の資料から同じ事物をどのように表現しているかの比較を行うことの二つが近道であろう。本節ではまず、『中山伝信録』には他に暦日の直前に暦月表現が、「数目」門に基数詞があるのでそれを確認する。

②正月（夏括子）二月（臑括子）三月（三括子）四月（式括子）五月（吾括子）六月（六姑括子）七月（失之括子）八月（瞎之括子）九月（空括子）十月（躑括子）十

一月（躑一之括子）十二月（躑膩括子）（75～86）

こちらは、語形や音価はともかく、2～12月のすべてが漢語で統一されている。現代日本語と同じであるから、取り立てて確認するようなことではないように見えるが、後述するように、その他の琉球方言資料においては必ずしもこのようなものが普通であるとはいえないので一応注意しておく。

次に、『中山伝信録』には「数目」門に基数詞があるのでそれを挙げると、

- ③一（抵子）二（打子）三（乜子）四（天子）五（一子子）六（姆子）七（納納子）八（呀子）九（科過礫子）十（拖子）十一（拖抵子）二十（膩祖）三十（摻祖）（以下略）（513～523）

とある。問題となるのは、10の語形がなんであるかという点と、11から20に飛んでいるのは12～19を11の要領で読め、すなわち10の和語形と既出の一位和語形とを組み合わせよ、ということだと考えられるが、それがどう読まれるか、の二点である。原田（1999）は十に「とう」のルビを振るが漢字表記からはそのようには読めないことは明らかであり、このテキストの他の例から、それとは別個に現代沖縄方言をあてたと考えられる。また十一を「ジュウイチ」としているがこれも一の漢字表記から和語形と考えるべきであり（注3）、となると十は和語形が何らかの混乱を起こしたものであると考えるのが自然であろう。

ただし、③からは、「和語形の場合は語尾にのみツが付く」ことからツのような語形があったとも考えられる。

そこで類似の資料として、時代を遡って明代の『琉球館訳語』の「数目」門で基数詞を見ると、

- ④一（的子）二（達子）三（密子）四（由子）五（亦子子）六（木子）七（那那子）八（甲子）九（姑姑奴子）十（吐）十一（吐的子）十二（吐達子）十三（吐密子）十四（吐由子）十五（吐亦亦子<sup>(ツツ)</sup>)十六（吐木子）十七（吐那那子）十八（吐甲子）十九（吐姑姑奴子）二十（達子吐）二十一（達子吐的子）二十二（達子吐子<sup>(ツツ)</sup>)二十三（達子吐密子）二十四（達子吐由子）二十五（達子吐亦亦子<sup>(ツツ)</sup>)二十六（達子吐木子）二十七（達子吐那那子）二十八（達子吐甲子）二十九（達子吐姑姑奴子）三十（密子吐）（507～536）

とある。『琉球館訳語』では以降「一銭」「二銭」と通貨単位を掲載するがそれらは漢語としている。他に『使琉球録』は1～20の、『音韻字海』は1～10の基数詞を掲載するが、10はいずれも「吐」であるから、『中山伝信録』の「拖子」は混乱したものとみるのが自然であろう。また、11の語形と12～19については、そういう和語での表現形式があったことを記録したものとみてよいであろう。ただし、『中山伝信録』では20以降漢語になっており、『琉球館訳語』等と比較して、時代が下って和語数詞の領域に漢語数詞が侵入してきたものとみるか、記録されていないが和語数詞と漢語数詞の両系列の数え方がある、『琉球館訳語』ではその系列を尊重して、『中山伝信録』では折り合いをつけて記録したかのいずれかの可能性があるであろう。なお、本土方言資料でも、『日本風土記』は、

- ⑤一（許多子）二（勿達子）三（密子）四（欲子）五（意子子）六（木子又後子）七

(乃子) 八 (孝子) 九 (箇々那子) 十 (多和) 十一 (壽一之又多々丟達子) 五十 (我壽又大) 百 (鰌古) 千 (仙又借一貫) 萬 (慢) 億 (和久) 一 (一) 二 (義) 三 (三) 四 (細) 五 (我) 六 (六古) 七 (西之) 八 (法之) 九 (姑) 十 (壽) (662~687) とあり、基数詞において、1から10のみならず11以降にも和語数詞と漢語数詞の両系列の表現形式のあることが示唆されている。

論を暦日数詞に戻す。

『中山伝信録』の①の表現体系について、前節では a: から f: までの6点の問題点に焦点を絞ったが、これらと本節でみてきた暦月・基数詞表現とを比較すると、そのうち b: と d: から f: については、暦日の表現体系として、他の数詞表現から独立していたことが確認できるであろう。なお、表現が現代日本語と比較して混乱しているように見える部分についてであるが、『中山伝信録』からやや時代の下った『琉球入学見聞録』にも暦月と暦日が同様に掲出されており、

⑥初一 (之搭之) 初二 (福子憂) 初三 (之搭之密憂) 初四 (之搭之喃喀) 初五 (之搭之一子憂) 初六 (之搭之美憂) 初七 (之搭之南喀) 初八 (之搭之約喀) 初九 (之搭之酷古盧喀) 初十 (之搭之突喀) 十一 (藤一子泥止) 十二 (藤泥泥止) 十三 (藤三泥止) 十四 (藤育喀) 十五 (藤古泥止) 十六 (藤魯古泥止) 十七 (藤十之泥止) 十八 (藤滑之泥止) 十九 (藤酷泥止) 二十 (瞎子喀) 二十一 (瞎子喀止) 二十二 (泥肉泥泥止) 二十三 (泥藤三泥止) 二十四 (泥藤摩喀) 二十五 (泥藤泥止) 二十六 (泥藤魯古泥止) 二十七 (膩藤失止泥止) 二十八 (膩藤滑止泥止) 二十九 (膩藤泥止) 三十 (三藤泥子) (99~128)

とあって、①と近似したものが伺える。d: のうち21日については同様の語形が記録されており、何らかの特殊な事情が考えられるが、これについては後述する。f: については現代日本語のそれと同じ具合に整理されており、両者の関係の有無はともかくとして、全体に①を修正したものと受け止められる。

#### 4 明代日本語資料における暦日表現

ところで、明代の日本語資料 (本稿では日本語という術語を琉球語に対するものとして使用している) においても、①と同様のものがみられる。『日本風土記』(注4) には、

⑦初一日 (初一旦之) ついたち 初二日 (勿子革) ふつか 初三日 (密革之) みつか  
初四日 (效世革) よつか 初五日 (意子革) いつか 初六日 (木一革) むいか  
初七日 (乃奴革) なぬか 初八日 (要革) 初九日 (箇箇那革) このか 初十日 (多和革) 一十日 (壽一之逆之) しゅう一日 十二日 (壽義逆之) しゅう二日 十三日 (壽三之逆之) しゅう三 十四日 (壽效之) しゅう四日 十五日 (壽我逆之) しゅう五日 十六日 (壽六工逆之) しゅう六日 十七日 (壽西之逆之) しゅう七日 十八日 (壽法逆之) しゅう八日 十九日 (壽姑逆之) しゅう九日 二十日 (法之革) にちし日 二十一日 (義壽一之逆之) にし一日 二十二日 (義壽義逆之) にし二日 二十三日 (義壽三逆之) にし三日 二十四日 (義壽效革) にしよつ日 二十五日 (義壽我逆之) にし五日

二十六日（義壽六工逆）にし六日 二十七日（義壽西逆之）にし七日 二十八日（義壽法之逆之）にし八日 二十九日（義壽姑逆之）にし九日 三十日（三壽逆之）さ十日（「日数」門）

とあり、細かい点で明らかに間違いらしきものがあるものの、①の特徴のc:とd:の後半、すなわち一位の暦日にチタチ（ついたち）が前置することと21日などの語形が特殊であること以外について、ほとんど同じ特徴を備えており、暦日表現という閉じた語彙体系の構造自体はほとんど同一とみてよいものである。換言すれば、中世後期～近世初期外国（中国）資料において、暦日の1日はツイタチ（チタチ）、2～10日と20日は和語数詞、11～19日と21～30日は漢語数詞で4のつく日は混種語になる（ただし琉球語では1のつく日も語形が変わる）といった現代日本語における特徴は、日本語資料にも琉球語資料にもみられ、違うのは一位の暦日にチタチか付くかどうかだけということである。

特に、漢語数詞4のシからヨ・ヨンへの変化については安田（2002）に詳しいが、14日・24日の混種語形については、中世末のキリシタン資料においても容易に見出されるものである。

⑧屋島に小隙ゆく駒の足早うして正月もたち、二月になった。（中略）同じ十四日に（jüyocani）範頼も平家追伐のために、七百余艘の船に乗って（以下略）（天草版『平家物語』巻4・325頁21行目）

よって①は、琉球語を含む日本語全体の暦日表現において、暦日14日・24日の語形において、「死日」を忌避する傾向が現れて以降の暦日体系であることからして、<ついたち〇日———とうか〇日———はつか〇日>といった語彙体系の傍証となるべきものではなく、琉球語資料において、なぜ一位の暦日にチタチが前置するのか、その理由を考察すべきものであると考えられるのである。

なお、話が前後するが、『日本風土記』における暦月と琉球語資料とについて補足しておこう。これら資料の暦日はおおむね1月が正月であり、2月以降漢語数詞となるが、『日本風土記』と『日本館訳語』『琉球館訳語』『使琉球録』『音韻字海』において、前者は12月が、後者は11月と12月とがシモツキ・シワスの和語異名になっている点で、『中山伝信録』のそれと異なっている。⑨は『日本風土記』の、⑩は『琉球館訳語』の暦月である。

⑨正月（少完之）二月（二完之）三月（三完之）四月（細完之）五月（我完之）六月（六工完之）七月（西之完之）八月（法之完之）九月（姑完之）十月（壽完之）十一月（壽一之完之）十二月（失外阿四）（76～87）

⑩正月（燒哇的）二月（寧哇的）三月（撒哇的）四月（升哇的）五月（惡哇的）六月（祿姑哇的）七月（是止哇的）八月（法只哇的）九月（姑哇的）十月（柔哇的）十一月（失木多及）十二月（失哇思）（89～100）

## 5 現代琉球先島（宮古八重山）方言における暦日表現とその周辺

現代琉球方言のうち、先島方言の暦日・暦月については、いくつか先行研究が存在

しているのをそれをまとめる。

他のさまざまな助数詞とともに体系立てて暦日・暦月表現を記述するのが宮良(1995)である。いくつかの助数詞表現や、本稿にて周辺表現として比較対象としてきた基数詞表現において現代日本語の「つ」に相当するチは20以上の和語数詞に接尾しないといった説明が行われる。その最後に、「(55)における月の名称は(稿者中略)、その後に(56)が続いて月日を表すこともできる。(57)は日数を数えるときの表現である。標準語と八重山石垣方言との間には、日にちの名称と数え方にずれが生じている。(56)と(57)における1日に対する表現は特異であり、10日に対する表現は同形である」(3, 2, 5. 数詞 123~4頁)とし、文番号(55)に月の数え方・(56)に暦日表現・(57)に算日表現を掲載する。この書では「八重山石垣」方言をIPAで記述しているが、本稿では便宜的にカタカナに直して(注5)、(55)の月に関しては現代日本語と同じくすべて漢語表現なので省略をし、後の二つ(⑪が暦日表現・⑫が算日表現)を引用すると、

⑪チキ=タチ<ついたち> ニ=ニチ<ふつか> サン=ニチ<みっか> ユ=ニチ<よっか> グ=ニチ<いつか> ルク=ニチ<むいか> シチ=ニチ<なぬか>  
ハチ=ニチ<ようか> ク=ニチ<このか> トウツ=カ<とうか> ジュウ  
=イチ=ニチ<11にち> ジュウ=ニ=ニチ<12にち>

⑫ピトウ=イ<1にち> フチ=カ<2にち> ミイ=カ<3にち> ユウ=カ<4  
にち> イチ=カ<5にち> ムイ=カ<6にち> ナヌ=カ<7にち> ヤウ=  
カ<8にち> クヌ=カ<9にち> トウツ=カ<とうか> ジュウ=イチ=ニ  
チ<11にち> ジュウ=ニ=ニチ<12にち>

となる。⑪の暦日1日については、「ツイタチがツキタチ(月立ち)に由来することは確実であるが、書記テキストに出てくる語形は最初からツイタチであり、ツキタチは確認できない」(小松(2001)149頁)ことから貴重であるし、舶来の暦法に由来する暦日が漢語数詞で表現されることなど、興味のある報告であるが、本稿のこれまでの議論とはあまり関係しない。

これとは別に、現代琉球先島方言について、時間の語彙体系として調査整理されたものに、柴田・日下部・加藤(1974)がある。この報告では、「移動的日数・月数」(算日・算月)を先に詳しく紹介した上で、「固定的な日・月」(暦日・暦月)の表現の仕方を記述している。それによれば、「日については、(中略:俗に暦日には十二支を使うものとする)、一般に、あるいは正式には、つきの中の何日と暦(旧暦)の日を呼んでいた。その呼び方は「一日」がツクツツであるだけで、二日以降は前述の日数の場合と同じである。ただし、十一日以降はジューイツツツのように漢語系の語を用いることもある」とする。つまり、算日は和語数詞で表現される一方、暦日は11日以降の表現で漢語数詞を使用してもよいということであるから、先の宮良(1995)とは様相が異なっている。以下、暦日と同じとされる「移動的日数」の数え方を引用すると、

⑬プトゥズ 一日 フツカ 二日 ミズカ 三日 ユーカ 四日 イツカ 五日 ム  
ユカ 六日 ナンカ 七日 ヨーカ 八日 ククウヌッカ 九日 トウカ 十日  
トウカプトゥズ 十一日 トウカフツカ 十二日 バツカ 二十日 バツカプト



ウズ 二十一日 パツカフツカ 二十二日 ミスウカ 三十日 ミスウカブツトウ  
ズ 三十一日

であるとされる。12日・22日の語形から、あるいは中古の「とうか○日」「はつか○日」を連想させるが、「ついたち○日」に相当するものとは共起していないから、ばらばらのものを寄せ集めてくついたち○日——とうか○日——はつか○日>という語彙体系を考える根拠にはならないであろう。

ここで注目すべきは、11日・21日などの語形である。それぞれ算日1日を表すブツウズがトゥカ・パツカの後に来ており、例の『土左日記』の冒頭の日付の「それのとしのしはすのはつかあまりひとひのひのいぬのとき」を連想させるが(注6)、それはさておき、これまでみてきた一連の明代・清代琉球語資料、具体的には①と⑥の問題点f:としたものの解釈の手がかりとなるのではないかということである。つまりは、暦日の21日は算日数詞の要領で表現され、それを記録したものが①と⑥である可能性があるのではないかということである。

なお、暦月についても、長くなるので引用しないが、この調査では「八月は「十五夜月」、十一月は「霜月」であって数字を使わないのが入り込んでいる」が、これも⑨⑩のごとき暦月の数詞の中に月の異名が入り込んでいることと関連がある可能性があるであろう。

## 6 まとめ——チタチという有標形の意味するもの

これまでの議論をまとめると、先行研究とその考察の中には、本稿0節にて紹介したような中古日本語の「ついたち○日」や『中山伝信録』のチタチ○カの表現形式について、そういう表現形式があったということと、現代日本語では1日以外曖昧な算日数詞と暦日数詞とを区別する手段があったということは確認できるが、それが即ち琉球語資料に中古にくついたち○日——とうか○日——はつか○日>という暦日の数え方があったとする、直接的な証拠は見当たらない。

改めて、チタチ(ついたち)という有標形の意味するものを考える。

かつて、中古日本語及び漢字資料の残された時代の琉球語において、暦日一桁台を算日のそれと区別するために、チタチ○カ(ついたち○日)という表現形式があったことは間違いない。しかし、それは暦日一桁台を表現する際にすべてその形式をとらなければならなかったという話につながるのでしょうか。現代日本語ではついたちは有標形ではなく、また、1日以外同じ語形でまったく混乱はない。さらに、チタチという有標化ではない暦日と算日の区別の仕方(音と訓)があることすら確認されるのである。

よって、このような表現形式を扱う場合は、逆に言えばそれが必要であった際に有標化したのではないのかと考えるのが自然であるのであって、現代における方言調査などでついたちに由来するものがでてきたとしても、その調査行為自体により有標化したものではないかと疑うべきものであろう。

なお最後に、本稿を執筆するに当たって常に居心地の悪い思いをしたのは、それぞ

れの資料が百年単位で離れていることである。その間の言語変化は非常に大きいものであろうから、本稿での主張がどこまで有効か、稿者以外の方に検証・追試をお願いしたいと切に思う。

## 注

- 1 同じ坂井氏のテキストでも、一般には『明代日本語資料』（汲古書院、1971）の方が入手・閲覧が容易かと思われる。なお、本稿における引用の中の漢字であるが、その資料では異体字であるものについて、特に必要でない限り、造字をしたり特殊なソフトを利用してその字を掲出したりすることせず、原則としてJIS漢字を使用した。本稿の引用形式自体が便宜的であることに鑑みて、適宜原典を参照されたい。
- 2 「日数詞（下）」64頁注40。
- 3 例えば①の「初五」から「初九」には「ぐにち」「どうぐにち」「しちにち」「はちにち」「くにち」と、②の「十一月」「十二月」には「しむちち」「しわあし」と、前者には漢字表記では和語形の数詞表現に漢語形を、後者はそれぞれ漢字表記では漢数詞に霜月・師走に相当するものを、それぞれ振り仮名にしている。これらに関して、凡例には特に注記や説明はない。
- 4 本文には記載しなかったが、日本語資料には坂井・木村（1975）を使用した。ただし、『日本風土記』については、これまで使用してきたこの対照表では本稿にとって重要な部分で不足があるため、京都大学国語国文学研究室編『日本風土記』（同国文学会、1961）年をテキストに使用した。
- 5 ただしニ＝ニチの最初の2つのことピトゥ＝イの最後のイ・ムイ＝カ以外のイ段はすべて中舌高母音のイであり、カタカナへの転写はかなり便宜的で正確ではない。詳しくはこの書の冒頭にある「発音と表記について」を参照のこと。
- 6 一位が1でない表現においても、この表現方式は『枕草子』の「とうかむゆか」を思い起こさせる。詳しくは拙稿（1993）を参照のこと。

## 引用文献

- 小松英雄（2001）『日本語の歴史 青信号はなぜアオなのか』笠間書院
- 坂井健一・木村晟（1975）『『日本風土記』・『日本寄語』・『日本館譯語』・『琉球館譯語』・『日本一鑑』寄語対照手冊』（近世中国における日本語研究会）
- 坂井健一・日本大学文理学部中国文学科研究室（1975）『『琉球館譯語』・『使琉球録』・『音韻字海』・『琉球入學見聞録』・『中山傳信録』寄語対照手冊』（近世中国における日本語研究会）
- 柴田武・日下部文夫・加藤正信（1974）「宮古島平良市方言における生活時間語彙」『人類科学』26（井上史雄他編『日本列島方言叢書34 琉球方言考⑦』2001年に所収）

- 多和田眞一郎 (1998) 『沖縄語漢字資料の研究』 溪水社
- (2004) 「沖縄語音韻史——口蓋化・破擦音化を中心として——」 『音声研究』 8-2
- 豊見山和行 (2006) 「冊封使・徐葆光の記録『中山伝信録』と琉球」 『国文学 解釈と鑑賞』 71-10
- 原田禹雄 (1999) 『徐葆光 中山伝信録 新訳注版』 榕樹書林
- 宮良信詳 (1995) 『南琉球・八重山石垣方言の文法』 くろしお出版
- 室井 努 (1993) 「平安期の和語〈暦日〉について」 『芸芸研究』 133
- 安田尚道 (1972) 「日数詞 (上・下)」 『国語と国文学』 49-2・3
- (1974) 「和数詞による暦日表現と『ついたち』の語源」 『国語と国文学』 51-2
- (1975) 「日本における日数表現の成立について」 『東アジアの古代文化』 別冊1975・大和書房
- (2002) 「シ (四) からヨンへ：4を表わす言い方の変遷」 『青山語文』 32